

哲学としての「カテゴリー」

カテゴリーは、日本語訳では範疇(はんちゆう)と表現される。物事を分類つまり区分を徹底的に行って整理して体系づけるための部門だ。

ここでは、この日常よく使われる用語はもっと深遠な「すべての思考の基盤となる哲学概念」なのだ、という古代ギリシャのアリストテレスの見解を紹介したい。

彼は次のように言う。「カテゴリーは『分類』の便利のためにだけにあるのではない。それは人がものを考え認識するときには必ず従わなければならない、最も一般的な概念体系の要素なのだ」

カテゴリーは「述語」を意味するギリシャ語だ。述語は主語の動作・状態・性質など、存在の基本的構造を表す言葉だが、そこからさらに認識の基本要素になった。

すべての思考の基盤

一方、哲学の巨人・カントは、人間の思考の最も一般的な形式としての純粹悟性概念としてとらえた。そして近代科学はそれを、理性関係、場所、時間、位置、状態、能動、受動を挙げて

アリストテレスのこの発想には、歴史的な背景が存在する。ピタゴラスによって創設された哲学の一派であるピタゴラス学派による

有限・無限、奇・偶、一・多、左・右、男・女、動・静、直・曲、明・暗、善・悪、方・矩(く)という分類の基本となる対概念、さきく違つてゐるのではないらにプラトンによる有、同、異、変化、持続など存在の基本を表現する概念から発展・展開したものだ。

このようにカテゴリーはある時代まで、人間の認識の基本項目であるとともに、世界そのもののあり方の基本形式と考えられていたのだ。

(東京大学名誉教授 和田昭允)

平成 30 年
2 月 13 日

ロマンある虹

吹いた霧に光を当て、いわゆる虹の7色を出す実験をテレビで見た。純水の霧とは別に塩水の霧を吹いたら、半径の違う虹が現れて二重虹になった。純水と塩水の屈折率の違いが演出したものだ。基礎物性の違いをこのように、それもちょっと意外な形で見せるのは、とても教育的だと感心した。

学問世界での虹は、ニュートンがプリズムを通した太陽光が「いろいろな色」に分解されるのを観測して、スペクトルと名付けたのが始まりだ。そこで彼は、光はさまざまな粒子が混ざり合つてできているとする「光の粒子説」を唱えた。しかし、フックやホイヘンなどに激しく批判された。

光線が水滴に入り、水滴と空気の境面で1回全反射して水滴から出てくる。水滴の面で2回屈折するか

テレビの教育的演出に感心

日本神話で、その冒頭に出てくるイザナギとイザナミの両神が立つ「天の浮橋」も、虹以外には考えられない。この虹を橋とする観念は誰もが思うのだろう。古代文明国家とは隔絶されていた北米の先住民にも、カナダ北部からメキシコまで広くみられる。

全く別の見方もある。旧約聖書の創世記では、ノアの洪水の後、神が「もう洪水を起しませぬ」という約束を交わした証書とされている。そういうわけであれば虹は、激しい夕立が晴れると現れる。

虹は自然が演出するさまざまな現象の中でも規模が大きく色彩に富んで心温まるから、昔からロマンを持つていろいろと語られてきた。古代の神話において虹は、神々によって造られた、天と地を結ぶ橋とされている。ギリシャ神話では女神イリスが神々の使者として、虹を通して天地を往来する。

(東京大学名誉教授 和田昭允)

平成 30 年
2 月 20 日